平成２８年度すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム報告書

すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム

# 災害に備えるまちづくり

## ～地域福祉を支えるプラットフォーム～

平成２８年７月２日（土）

# すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム

## プログラム

**12:00 開場** （災害関係ボランティアなどのパネル展示あり）

**13:00**

オープニング

### 第三次墨田区地域福祉計画〈後期〉の紹介
**～地域住民の心と活動をつなぐプラットフォーム～**

墨田区では、地域住民や関係機関のつながる場である「プラットフォーム」づくりを進めています。

**13:20**

### 被災地・仙台からの報告

**●講演会／事例発表**

**仙台市社会福祉協議会　町内会　民生委員・児童委員**

**「震災前からの取組と震災後の被災者支援」**

東日本大震災で被災された仙台市の地域福祉活動にかかわって来られた皆さんから、被害に直面した時に災害以前から取り組んでいたことがどう役立ったかということを中心に、住民同士の連携、被災者支援の取り組みについてお話を伺います。

**15:00**

グループディスカッション

### その時のために 今できること
**～みんなで話そう～**

もし、今、墨田区で災害がおこったら、あなたはどうしますか…
「その時のために、今できること」を参加者のみなさんと話す中で、地域のために役立つヒントを見つけましょう。

## 参加申込書

●以下の内容にご記入いただき、**6月30日までに**FAXまたはEメールでお申し込みください。
●当日参加も受け付けます。

| 名前 | 所属団体名等（個人の方は記入しなくて結構です） |
|---|---|
| | |

一時保育（1歳～就学前まで）及び手話通訳を希望する場合は6月24日までにお申し込みください。

どちらかに○をつけてください

**1** 一時保育希望（お子さんの年齢　　才）

**2** 手話通訳希望


**●墨田区福祉保健部厚生課**
FAX：03-5608-6403　　Eメール：KOUSEI@city.sumida.lg.jp　　☎03-5608-1163

**●すみだボランティアセンター**
FAX：03-3610-0294　　Eメール：vc@sumida-shakyo.or.jp　　☎03-3612-2940


※どちらに申し込んでいただいてもけっこうです。

## 第６回すみだ地域福祉・ボランティアフォーラムが７月２日に開催されました

### ■フォーラム概要

１　趣旨

　墨田区における地域福祉の推進とボランティア活動への参加促進を図るため、民生・児童委員、ボランティアグループ活動者、小地域福祉活動参加者、福祉施設・福祉事業者など地域福祉とボランティア活動の関係者や活動に関心を持つ者等が一堂に会し、地域福祉・ボランティア活動について一緒に学び、考え、交流し、広く活動への参加を呼びかける。

　今年度は平常時の地域福祉活動やボランティア活動の推進ではなく、災害時に焦点を当てた地域福祉、ボランティア活動をテーマとする。

２　日時

　平成２８年７月２日（土）１３時から１７時まで

３　場所

　すみだリバーサイドホール

４　内容

（1）第三次墨田区地域福祉計画〈後期〉の紹介

（2）被災地・仙台からの報告「震災前からの取組と震災後の被災者支援」

（3）グループディスカッション「その時のために 今できること ～みんなで話そう～ 」

５　主催

　すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム実行委員会、

　墨田区、墨田区社会福祉協議会

６　来場者数

　約２００名（関係者含む）

## ■　司会者紹介

今年度は実行委員の山田委員・
五十嵐委員が司会者でした。

## ■　開会挨拶・開催挨拶

すみだ地域福祉・ボランティアフォーラムの開催にあたり、山本亨墨田区長、大屋社会福祉協議会副会長、鎌形実行委員長から主催者の挨拶がありました。

■山本区長の開会挨拶の様子

■大屋副会長の挨拶の様子

■鎌形実行委員長の挨拶の様子

## ■第三次　墨田区地域福祉計画〈後期〉紹介

墨田区では、平成 23 年３月に「第三次墨田区地域福祉計画（平成 23 年度～平成 32 年度）」を策定し、区民、地域で活動されている団体やボランティア、社会福祉法人等の皆様と区が連携・協働して地域福祉を推進してきました。

このたび、計画の中間年にあたり、昨今の社会状況の変化等を踏まえ、今後５年間の後期計画として改定を行い、地域住民や関係機関のつながる場である「地域福祉プラットフォームづくり」を、今後の地域福祉を推進していく上での基盤になる考え方として位置付け、推進しています。

昨年、墨田区地域福祉計画推進協議会会長として改定にご尽力された、興望館保育園長の野原健治様にこの計画を紹介していただきました。

■野原健治様の講演の様子

○　講演概要

地域福祉計画は墨田区における福祉分野の部門別に策定している各個別計画の基礎となる福祉計画であり、国から示され、上から降りてくるというものではなく、地域住民の意見を十分に反映させながら策定する計画である。

今回の計画では、「プラットフォームづくり」を基盤となる考え方として位置付けた。プラットフォームとは、電車のホームではなくもともとは人が集まる平らな場所という意味である。ここでのプラットフォームは「日常で課題を感じた人がそれを解決する場」であるが、今日のこのフォーラムの場もプラットフォームと言える。これには中心になる人が大切で、１人でできなければ２人で、２人でできなければ３人でやる。４人でやる。そしてそれを支える人がいる。そして、新たなネットワークができる。

一番大切なのは、一人ひとりが主体的に集まり課題に取り組むということで、これが「ボランタリズム」である。福祉構造改革はまだ始まって 16 年。地域福祉は新しい挑戦である。

## ■被災地・仙台からの報告「震災前からの取組と震災後の被災者支援」

東日本大震災で被災された仙台市太白区の地域福祉活動にかかわって来られた皆さんから、被害に直面した時に災害以前から取り組んでいたことがどう役立ったかという内容を中心に、住民同士の連携、被災者支援の取り組みについてお話を伺いました。

■　多くの皆様にご参加いただきました。

■　仙台市太白区からお越しいただいた講師の皆様

■　コーディネーターは
墨田区社会福祉協議会事務局
山田次長でした。

仙台市太白区と墨田区の比較

位置



| | 仙台市太白区 | 墨田区 |
|---|---|---|
| 面積 | 228 ㎢ | 13.77 ㎢ |
| 人口 | 226,242 人 | 263,456 人 |
| 世帯数 | 102,021 世帯 | 143,338 世帯 |
| 高齢化率 | 約 23% | 約 23% |
| 町会数 | 270 | 169 |
| マーク | | |

H28.4.1 現在

「東

# 「東日本大震災から復興への歩み」
## 古谷信之氏（仙台市社会福祉協議会太白区事務所長）

略歴：平成 22 年４月　仙台市太白区区民部長
平成 23 年３月　東日本大震災発災、太白区災害対策本部事務局長としてその対応にあたる。
平成 25 年５月　社会福祉法人仙台市社会福祉協議会太白区事務所長　　現在に至る

○　講演概要

震災の時は墨田区からも 10 名の職員の方に応援に来ていただき、たいへん感謝をしている。この場を借りてお礼を言いたい。私からは社会福祉協議会の立場から、震災の概要と 5 年間の復興の歩みをお話しする。

仙台市太白区は商業地、住宅地が混在した地区である。

政府の調査委員会で「宮城県沖地震は前回地震から 30 年の間に 99%起こる」と言われていたので、平成 20 年から災害時要援護者支援のしくみづくりに着手した。太白区では、社会福祉協議会、連合町会、民生委員児童委員協議会と一緒に「太白区災害対策総合検討委員会」を立ち上げた。地域団体の連携が必要ということで、冊子も作って啓発をした。また、震災の 1 か月前に、平成 16 年、19 年と中越地震が起こった柏崎市の方をお招きし、「16 年は死者が出たが、19 年は経験を踏まえて準備したためスムーズに行動できた。」という話を聞いた。

マニュアル作りでも、前は行政がするもので地域住民はお手伝いだと思っていたが、東海地震を見据えて活動している静岡の方に話を聞いたときに、市民はどう動いたらいいかという目線のマニュアルを作った方が良いと言われ、検討委員会に進言をした。区役所でも、避難所を運営する役の職員に震災の 1～2 か月前に研修を行っていた。職員と学校と町内会の顔合わせもしていた。

発災後、仙台市全体では 979 名の方が亡くなった。太白区は比較的被害が少なかったが、宅地被害は多く、下水処理場なども全壊してしまった。工場がすべて停止していたので工場排水の垂れ流しはなかったが、人の汚物は自然漂流していた。震災ごみの処理だけで 2 年かかった。がれきが片付かないと被災者が前向きになれない。1800 億円を使って専用のごみ処理場をつくり、自分の地域のがれき処理が終わってからは、他の地域のものも受け入れた。

社協では、災害ボランティアセンターを立ち上げた。訓練はしていたが、実際の災害となると情報が錯そうし、正確なものかどうかわからなかった。限られた人員と情報の中で対応しているので、上

司の判断を仰げないこともしばしばあり、その場の職員の判断で柔軟に対応せざるを得なかった。それをみんなで報告しあい、日々の判断事例がルールとなった。そのため、区ごとにルールのばらつきも出てしまった。

福祉避難所は一般の避難所に入ることが困難な人が来ることになっている。基本は仙台市から「この人を入れてください。」と来ることになっていたが、その役所の人が来なかった。施設職員ですべてに対応することになったが、特別な支援を必要とする障害者や、難病を抱えた世帯への対応は困難であった。職員は３交代制で 24 時間の体制をとり運営した。

社協は、被災による失業などの方へ、通常行っている緊急小口資金貸付の特例として、10 万円から２０万円の貸付をした。当初は３日間の予定だったが、殺到してしまったので、１か月間に延長した。想定の２倍の方が来たが、若い世代の方が多かった。その他、り災証明等の発行で約５万件、家具などの被災が別に約５万件、義援金、被災者生活再建支援金などについて、土日も休まず対応した。

仮設住宅、借上げ民間賃貸住宅、借上げ公営住宅については集落単位で入ってもらった。

区でそういった仮設住宅におけるコミュニティの支援として、イベントを行うなどの交流活動に助成をした。社協では、借上げ賃貸住宅入居者の孤立を防ぐため、交流イベントやサロンを実施した。復興公営住宅も３２００戸整備したが、復興住宅に入れない人、自分で先のことを決められない方などの相談にも個別に訪問し対応した。その他、コミュニティソーシャルワーカー等による支援も行った。具体的な事例を示すと「鹿野復興公営住宅」では入居半年前に連合町内会、地区社協、地区民児協等とともに支援者連絡会議を設立し、入居後に交流会や連絡会、イベント等を開催した。

災害ボランティアセンターは仙台市が設置し、仙台市社協が運営した。中学生も避難所の移動などに協力した。

まとめとして、

１　日頃の準備が大切である。日頃から準備していなかったことは、急にできない。

①実践的な訓練や研修が役にたつ。　②他の地域で起こった災害が自分のところで起こったらと常に考える習慣にすることが大切。　③地域住民の連携協力が住みよい安全な町をつくる。

２　公平性と柔軟性

〈発災時〉　想定外の事態への対応は臨機応変に判断、柔軟に対応する

〈復旧・復興時〉　被災者の意識が変化し、公平性が重要になる。支援物資、サービス、情報などの少しの格差がクレームとなる。

〈その他〉　ＮＰＯなどが独自ルートで支援し、補完された。

３　地域住民が支え手となる

①行政や社協は、人的、時間的な制約があり多様な被災者の声を聴くことができない。

②要援護者を支えたのは、民生委員、町内会役員、隣近所の住民などであった。

（ガソリン不足等様々な事情でヘルパーさんなどは訪問できない状態だった）

# 「東日本大震災における柳生南町内会の取り組み」
## 阿部欣也氏（太白区社会福祉協議会　会長）

略歴：平成　７年４月　柳生南町内会　会長
平成 17 年４月　中田西部地区社会福祉協議会　会長
平成 24 年５月～26 年５月　仙台市連合町内会長会　会長
平成 24 年５月～26 年５月　太白区連合町内会長協議会　会長
平成 26 年４月　太白区社会福祉協議会　会長　　現在に至る

○　講演概要

柳生南町会は、太白区の一番南にあり一般住宅とマンションが混在する世帯数１２００の住宅地域である。マンションが多いため、高齢化率は太白区の中でも低い方で 17%となっている。

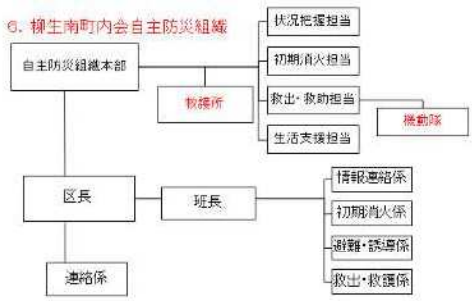
震災前までは、必ず来ると言われていた宮城県沖地震に備え、太白区社協で『宮城県沖地震「99%」に備える』というＱ＆Ａ方式の冊子をつくった。その後太白区災害対策総合検討委員会ができ、平成２２年度中に各地域で、学校、町内会、地域団体が協議し、避難所開設や運営の訓練を実施するよう方針を打ち出した。それを受けて、柳生南町内会では今まで長い間やってきた訓練を見直した。今までは避難場所に集まりそこで防災訓練をしていたが、町内会独自の一時避難場所を４５か所つくり、まずは家の近くに集まり安否確認をすることにした。その他、火災が起こったらみんな初期消火活動をしよう、負傷者の救出もしよう、町内会に２５人いる要援護者をどう支援したらいいかなどを話し合った。特に大切なことは、被災状況の確認と指定避難所への避難の有無の確認である。それをしないととても多くの人が避難所に押し寄せることになる。それを防ぐために、どのような場合に避難が必要かということを事前に確認した。それと同時に、指定避難所への誘導についても確認した。避難所の開設については、町内会が中心となって、学校、行政、各種団体の代表者が集まって委員会を作り、マニュアル、組織づくり等についてどうしたらいいか半年ほどかけて話し合った。これに従って、平成２２年１１月に１つの学校を使って指定避難所開設・運営訓練を実施した。震災が起こる半年前だった。

そして震災が平成２３年３月１１日に発生し、甚大な被害をもたらしたのは津波と土砂崩れだった。柳生南町会ではまず町内全域を車で巡回し、被害状況を確認した。火災の発生なし。家屋の倒壊もなし。ただ、瓦が落ちたものは多数あった。住民は一時避難場所に集合したが、負傷者もなかった。電気・ガスは停止したが、水道は被害がなかった。ただ、マンションの居住者から、家具の転倒とエレベータの停止で住める状態ではなくなったため、避難所を開設してほしいとの要望があった。しかし指定避難所である学校の体育館は照明が落下し、使用できない状況であったため、急きょ町内会の集会所を使用することにし、役員を通じすべての家へ伝えた。停電していたので、ま

ず発電機を出し発電を開始。照明をつけ、テレビ放映をした。テレビ放映はいろいろな情報がわかり、皆さんが安心する。その後、３００人ほどは入れる集会所もいっぱいになってしまったので、再度学校へ行き、教室を使わせてもらうようお願いしした。

炊き出しは翌日の朝からすることを決め、準備をした。避難所運営については家屋の倒壊もなかったため通電されるまでと決め、寝具は自分で持ってきてもらうようにした。翌日、再度安否確認し住民に異常がないことを確認した。避難所にいる人には、日中は家の後片付けをして早く家に戻るよう促し、食べ物は町内会で炊き出し等するということにした。避難所を必要とする人は徐々に減り、６日目で利用者は０になった。

次に、要援護者（ひとりで避難できない方）の対応だが、仙台市は要援護者が自分で登録するようにしている。柳生南町会には要援護者が２５人いる。このうち６人は避難所に避難してきていたので、避難所で支援した。あとは在宅の方だったので、その方たちは民生・児童委員と町内会の役員で一緒に回り、配食をしたりした。




炊き出しについては、朝食班、昼食・夕食班にに分かれ、町内にある大規模農家から玄米を購入し精米しておにぎりを作って配布した。その他仙台市から支援物資としての食料、平常時から災害時に協力をお願いしている団体、個人からの食料を配布した。

柳生南町内会では自主防災組織を作っている。特徴としては、救護部として平常時から病院と契約をしていて、訓練にも参加してもらっている。機動隊として農家で大型のトラクターなどを持っているところがあるので、壁を取り除いたり、がれきを持ち上げたりと活躍してもらう。４トントラックを持っているところからは災害時には使わせてもらう約束をしている。生活支援担当は炊き出し指導をする人だが、かまどでご飯を炊くことは難しく、指導するおじいさん、おばあさんが張り切ってこの係をやっている。備品についても何年もかかって必要なものをそろえた。

避難所開設も短い期間だったので、担当も決めずに「おにぎり作るから集まってください」とか「トイレ掃除するから集まってください」などというと、避難者の方も快く集まってくれた。子どもたちも口コミで来て手伝ってくれた。このようなことに参加をして、みんなの力になりたいと誰もが思っていたようだった。

おにぎり作りを手伝う避難者

実践から得られた課題と今後の体制づくり

１　柳生南町内会では

今回の震災は日中でもあり、家屋倒壊、火災もなかったので、通常の訓練とほぼ同様の状態で行われた。

今回の課題

①　指定避難場所への避難の有無を確認すること。

必要のない人まで押し寄せて、たいへんなことになった。家に住むことができないか、ライフラインが止まってしまったかなど確認し、家で生活できる人は家にとどまってもらうことが大切。

② 町内会に入っていないマンションに対する呼びかけ

町内会に入っていないマンションの人は何もわからず押し寄せた。震災後、町内会に入るか入らないかは後で良いから、まず避難訓練に参加してくれとお願いした。そうすれば災害時にどのように動くかがわかるからそれを守ってくれと。そうしたら、その後５つのマンションの内２つが町内会に入ってくれた。いざというときはこの人はいい、この人はだめとは言えない。

③ 食料の備蓄

各家庭で３日分の食料の備蓄をお願いするようにした。町内会には米があるので、あとは町内会で何とかする。

④ 夜間訓練の実施

日中でさえもあれだけ混乱した。夜間に起こったらさらに混乱が予想される。

⑤ 非常持ち出し袋の徹底

訓練では持ってきているものが、災害時には何も持たすに来る人がいた。

２ 仙台市では

地域防災計画の大幅見直しを行った。

今までの地域防災計画はどちらかというと役所向けのものだったが「自助・共助」と「公助」の協働による防災・減災を目標としたものとした。

① 「指定避難所運営マニュアル」素案の提示

② 「地域版指定避難所運営マニュアル」作成の提案

市内町内会からの「706 件の意見書」提出

「町内会が最初に活動することを明記してほしい」「帰宅困難者の避難所は住民の避難所と違うところに決めてほしい。そうしないと住民が入りきらない。まず企業は従業員を返さないということを徹底してほしい。」など。

③ 作成委員会の設立

地域ごとに事情の違うことがいろいろあるため、各避難所ごとに「地域版指定避難所運営マニュアル」を作成するための委員会を立ち上げた。

どこかから言われるのではなく、自分たちで作ろうということが大切である。

われわれは、まず、「防災・減災を主軸に置いたまちづくり」それから「地域包括ケアシステムの再構築」に取り組んでいる。そのために何をすればいいかを考えて行こうと思っている。

# 「東日本大震災における民生委員児童委員の活動について」

## 大友まり子氏（太白区民生委員児童委員協議会　副会長）

略歴：平成　６年　民生委員児童委員主任児童委員
　　平成 19 年　民生委員児童委員
　　平成 22 年　長町地区民生委員児童委員協議会　会長
　　平成 25 年　太白区民生委員児童委員協議会　副会長　　現在に至る

○　講演概要

自分が活動している長町地区は高層マンションと古い家が混在する地域である。墨田区と似ているかもしれない。民生委員・児童委員は主任児童委員を含めて２５人。一人が３００～３５０世帯を担当している。平均年齢は６８歳ぐらいで、２５名の内８名が男性である。

災害前は、要援護者の日常の支援・見守りや各町内会の防災訓練参加、「民生児童委員の地震災害時対応」というマニュアル作り等をしていた。

３月９日に震度４の地震があり、たいへん大きな地震に感じ、要援護者の安意を喚起した。そして、その２日後に大震災が発生した。

発災から２、３日の間の活動をお話する。

まずはマニュアルどおりに、自分の安全を守り家族の安否確認をした。

その後は、正しい情報収集に努めた。すぐに停電してしまったので、車のラジオを使った。その後、担当地域の要援護者、「気になる人」への安否も土ぼこりが立ち、家財道具が散乱し、ガラス窓の破損がみられたので、「帽子をかぶって、手袋して、靴はいて」と言って回った。停電しているため、夜になるとさらに危険なので、家の中でも靴を履いているように伝えた。安否確認は夜の１０時過ぎまでかかった。

それをしながら小学校にも行ってみた。既に避難所が開設されていた。まだ学校の子どもたちが残っていたが、親が迎えに来てもマンションの人がほとんどだったので、そのまま避難所に入るケースが多く、学校はごった返していた。地域住民が避難所へ行ってみると、既にマンション住民、帰宅困難者ですし詰め状態になっていたので、在宅避難を余儀なくされた。

食糧配分表～避難者のグループ分け

近くの大学職員にも手伝ってもらい、食料配分表（避難者のグループ分け）を作成。各グループではリーダーを決めた。食料が半分しか来ない場合は半分の量を配布し、その中での配布はグループごとに任せた。それも、１日目、２日目は全く来ず、３日目からようやく配布された。

１週間ほどたったころ、地区の民生委員が全員無事だったということが把握できたが、ほとんどの民生委員が被災者となっていた。やっと fax でのやり取りができるようになり、情報が来るようになってからは、その情報を被災者の方に伝えるという作業をしていた。

長町周辺は、太白区の中では大きな被害のあった地域で、全壊したマンション、集合住宅も多く、塀の倒壊、地盤沈下、道路亀裂・陥没、水道管破壊等の被害があった。ライフラインもストップしたが、ガス以外は数日で復旧した。十数年前まで田んぼ等の湿地だったところを開発した地域のため、地盤が軟弱であったことと、２分半続いた揺れが２回来たことが大きな原因ではないかと思われる。

そんな中、心温まる話があった。集合住宅が全壊したため、多くの住民が建物の中に入れず、外で寒さに震えていた時、すぐそばにあった仙台市交通局長町営業所の所長さんの英断でバス３台を一時避難所として開放してくれた。停電している中、照明もつき、暖房もついた。

住民たちは「頑張らなくてはいけない」「不安な夜もみんなと過ごせて心強かった」と本当に感謝した。避難所と指定されてないところも、避難所になるんだと実感した。

市バス避難所の御礼を述べる避難者

避難所運営者も１週間ほどすると家に帰らなければならなかったので、「今後は地域住民で運営してほしい」と言われ、民生委員として協力することになった。この避難所は４月３日に区が避難所を集約するまで開設していたので、その間ずっと手伝っていた。

避難所１日のタイムスケジュール

６：30　役割責任者会議
７：00　朝食配布・生活物資配布（リーダーに数を把握してもらい、その数だけ渡す）
７：40　片づけ
８：00　支援者朝食
９：00　清掃（避難者とボランティア）
10：00　相談等（民生委員として健康面、金銭面、住まい等の相談を受けた）
11：00　炊き出し等昼食準備
（ガソリン・灯油不足で暖房も控えていたため、温かい食べ物で暖を取った）
13：00　昼食・夕食配布　話し合い　医療相談　ボランティア活動
18：00　夜間担当者に引き継ぐ

この時、中越地震を体験した新潟市の職員が手伝いに来てくれた。体験に基づくアドバイス等もいただき、本当にありがたかった。

その時、在宅避難していた高齢者世帯へ食料等の配達をした。各民生委員の情報からの情報をもとに、使い捨てカイロ等やカップめん等を配布したが、みなさん高齢者なので、何時間も並ぶことができなか

ったこともあり、泣いて喜んでくれた。

各民生委員が配布したが、避難所に来ていた小・中学生が袋詰め、運搬等に協力してくれて、本当に役に立ってくれた。

避難所運営を手伝って大切だと思ったことは①避難者名簿の作成（他からの行方不明者等調査の手がかり）②相談者の存在　③在宅避難者救援の必要性　④小・中学生の支援協力　⑤長期間になった時の避難者間の交流（演芸会などをやって笑顔になる）

今後の課題

① 情報手段を失った時、安否確認はどうしたらいいか

テレビ・ラジオ等による正しい情報収集に努める。

自宅電話が使えないときの具体的手段を講じる。

集合場所、伝言方法を決めておく。

② 発災時、どこまで、何をするか

民生委員にも限界があることをわかってもらい、近隣住民への協力を前もって促しておく。

民生委員、町内会、諸団体の役割分担を前もって決めておく。

無理して避難所に誘導せず、在宅避難者として支援する。

③ マンション入居者の安否確認

マンションの管理人と事前に打ち合わせし、マンションの中での安否確認をお願いすることも大切

最後に、「非常時に地域の中で進んで協力する力を育てよう」ということをお話しする。地域の中学校で１年生全員が高齢者宅を訪問するといった安否確認訓練を実施している。

あらかじめ民生委員が選定し、校長先生からのお願いの手紙を届けているお宅に中学生が訪問するというものである。子どもたちは地域のことを全く知らなかったので、地域の一員になったように思うと、とても喜んでいる。

とても良い取り組みなので、紹介しておく。

## ■グループディスカッション
## 「その時のために　今できること」　～　みんなで　話そう　～

もし、今、墨田区で災害がおこったら、あなたはどうしますか・・・

仙台からの報告を聞いて、参加者の皆さんが１７グループに分かれ、少人数で話し合いました。

皆さんからの意見では

●平常時から地域（個人、町会同士）が仲良くすることが地域福祉につながる

●住民一人一人の防災意識をどう高めるかが課題

●子どものときから、防災訓練やボランティア活動について教育することが大切

●実践に則した訓練が必要

●古くから住んでいる人、新しく越してきた人、マンションに住んでいる人等の意識の違いが課題

●緊急時にマンションのオートロック対応ができるか

●個人情報の取扱がむずかしい

といった意見が多く出ていました。

皆さんがグループごとに話し合った内容を一部ご紹介します。

**ファシリテーター1　記録１　参加者　4**

・中学生が授業の一環として地域の防災訓練に参加できるといい

・仙台では、小学生が避難所で手伝っていることに感銘を受けた。子どもにボランティア活動の意義を知ってもらうことは大切である。

・個人情報保護の壁について再考を願う。

・避難所で女性特有の物資を配布するとき、配布係に女性が入っていることは大切。日頃から、町会活動にも婦人部以外の女性に参加してもらいたい。

・熊本地震の報道で、戸建て住宅に高い危機感を持った。個人の防災意識を高めるのは今しかない。

**ファシリテーター1　記録１　参加者　4**

・避難場所は当てにならないので、町会で３階以上にある避難場所を作ってほしい。

・避難所には１人なら行けるが高齢者を連れては行けない。個人のつながりが大事である。

・訓練は実践に役に立つことをやらないといけない。

・町会は町会の会員だけを助けるのか。その話し合いをしなくてはならない。

・子どもは学校で保護し、親が迎えに行って引き取ることになっている。一般の人は学校に避難できるのだろうか。

・もう一度街を作り直すつもりで行かないといけないのではないか。
・仙台では避難所に行く基準などを災害前から町会の方に研修をしていた。こうした取り組みが大切だと思う。
・地元にいる小学校５・６年生や中学生と一緒に訓練をしたい。小さいころから訓練に連れてこられていた子は大きくなっても来る。教育が大切。

### ファシリテーター1　記録１　参加者　4

・高齢者ばかりで不安。避難所は遠いしエレベータは止まる。
・高層住宅なので、東日本大震災の時は中学生に協力してもらい高齢者の移動を手助けした。
安否確認票を作り、ドアの前に貼ってもらうことにしている。
・避難所運営には、平常時から町会同士が顔見知りになり仲良くなっておくことが大切。
・地域と学校が一緒になった避難訓練を実施したい。
・究極の地域福祉は「近所が仲良くすること」
・必ずしも避難所へ行く必要はない。在宅避難ができればよいが、食料の確保が難しい。

### ファシリテーター1　記録１　参加者　6

・地域性は異なっているが、プライバシーの問題など共通の課題もあり参考になった。
・みまもりネットワークを立ち上げたので、だいぶ安否確認がスムースにできるようになった。今日の話を参考にさらに進めていきたい。
・自分は難聴者である。災害時の不安を訴えると、民生委員がいるから大丈夫と言われる。しかし、民生委員さんの顔も知らない。
・要支援者の方から声をあげてくれると民生委員は動きやすい。
・お互いを知ることが大切。このような会を続けることで、何をしていくか、何ができるかを考えていきたい。

### ファシリテーター1　記録１　参加者　5

・今からやっておくこと
　避難所がどこにあるか把握しておく。
　食料や水を家に備蓄する。
　自分は耳が聞こえないので、「耳が聞こえません」というバンダナを備える。
　窓に飛散防止フィルムを貼る。
・耳が聞こえないので、災害時の混乱を乗り切れないと思うので、自宅で助けを待つ。避難所には行かないと思う。
・行政、地域に望むこと
　食料、毛布の配布　　非常用トイレ設置　　福祉避難所にバンダナを置く

### ファシリテーター1　記録１　参加者　4

・日頃の防災訓練に現実味が感じられず、効果が疑問である。もっと具体的なイメージがわくような訓練やテーマ（夜間訓練等）を決めた訓練が必要。参加率も上げなくてはいけない。

・浸水シュミレーション等ももっとみんなが見る機会を増やして、イメージを持ちやすくしたい。

・自助の大切さを考え、備蓄や大型家具の転倒防止を実践する。

・地域のコミュニケーションの大切さを実感した。

### ファシリテーター1　記録１　参加者　4

・マンションには特有の課題がある。

引っ越しが多く定住しない　　エレベータが止まったらたいへん

半分以上の住民が表札を出していない

隣人のことを知らない

・個人情報が課題となっていて、情報が入手しにくい。

・京島を中心に活動中である。密集地なので、火災や住宅の倒壊を抑えるようにしたい。消防団と一緒に防災訓練をしている。

・仙台の話から、発災後３日間の生活の仕方が気になった。自分で何とかしないといけないが、何をすればいいかわからない。

・3.11 の時、区から安否確認をしてくれと言われたが、最低限のことしかできなかった。
今日の「民生委員にも限界がある」という言葉が心にひびいた。

・防災意識をどう持つか、どう高めるかと若い力をどう引き出すか課題。日頃から考えていれば横のつながりや個人情報についての意識も高まるのではないか。

・区では商店街の活性化も行っている。日常と災害時を分けずに活動することが大切。

### ファシリテーター1　記録１　参加者　4

・3.11 以後、町内で気になる人を心配してくれる人が増えた。

・介護施設は災害時、通常の利用者のほか、福祉避難所としても対応する。

・在宅子育てファミリーへ避難所の場所、防災アプリ等がわかるものを配布したらどうか。

・防災訓練は、子育て世代が参加できるような企画を考えるとよい。子育て世代は、子育て世代だけ

で集まっている。興味をもつようなイベントにからめるのも一つの手だ。

・児童委員は在宅子育てファミリーをファミリー同士でつないでいる。リストなどはないので、自分で開拓している。

・高齢者は様々なサポートで情報が共有されつつあるが、子育て世代、子どもたちのサポートはまだまだ足りないと思う。

・保育園で在宅子育てファミリーを対象に、ぴよぴよ広場というのを開催している。異世代交流などもやっていて、お互いがつながるようにしている。

・今日の講演は、内容はとてもよかったが長かった。

### ファシリテーター1　記録１　参加者　5

〈災害時、自分はどうしたらよいか〉

・自分と家族を守った後、自治会の安否確認、応急処置等をすることになるが、どのようにやっていけばいいか。

・避難所には必要な人しか行かないようにした方がいい。自分の地域では水が出ることが心配。船の活用も検討している。

・保育園なので、災害時は子どもを守ることが一番になる。そのあと自分を守ることになると思う。

・福祉施設なので、館内にいる時であれば利用者への避難指導、外出していたら訪問先の支援をすることになるが、自宅だと地域の把握ができていない。

・3.11 の時はたまたま外にいて、家より地域の方の安否確認が優先だった。
安否確認の必要な方が多くて回りきれなかった。

〈３.１１後、備えていること〉

・年１回、防災訓練をやっているが、実際に起きたときどうするかという細かい詰めはできていない。誰が責任者なのかなど、システムづくりが必要。

・施設では年１回の防災訓練と、食事３回分の備蓄をしている。マニュアルが細かすぎて実際できるかが不安。自己判断でどこまでできるかの訓練が必要なのでは。

・新しいマンションにはイベントなどの貼り紙をしている。PTA にかかわってもらうのも大切

・日頃の顔見知り関係が大切。趣味などを通じて小さい横のつながりから作ってはどうか。

### ファシリテーター1　記録１　参加者　5

・マンション住民とは日常的なかかわりが薄く、働きかけが困難。災害時が心配である。

・町会で確保している食料が不足。他の設備や備品も今から用意しておかなくてはと再認識した。

・町会の役割は災害時特に重視されると思う。町会、民生委員、公的機関等が普段から連携しておくと対応がスムーズにいく。

・災害時の準備として情報収集の必要性を感じる。防災訓練の参加、緊急時にしていいことの確認（ドアを壊していいか・・など）、まちあるきで地域周辺状況の把握。

・自分や家族の避難、他者の救助・支援、仕事としての役割などのバランスがむずかしい。

**ファシリテーター1　記録１　参加者　6**

・3.11 のとき町会の防災部長だった。災害弱者のリストやサポート隊を作ろうかと考えている。

・今日の話はたいへん参考になった。墨田区の場合、場所がないのが課題である。

・子どもや高齢者も、一人一人が役割を持って行動することが大事だと感じた。

・楽しくやるということが大事だとわかった。若い人がどんどん入ってきてくれるとよい。

・誰がどこに住んでいるのか知らなかったのが問題だと思った。

・区からマンションで備蓄をするように言われているが、各個人がした方がいいと思う。

・行政で、区民への防災教育をしてほしい。１階に備蓄するようなことになっている。

・防災リーダー研修に行って、目がさめた。

・家具を留めてはいるが、震度７～８で役に立つのか、食べ物などは大丈夫だが助けてもらったり、避難所まで誘導してもらったりできるかが不安

・保育園なので、保育中の地震に対し不安がある。保護者が迎えに来られるまで、ミルクや離乳食が不足しないかなど。

・災害時に泥棒が来るらしい。地域で守らないといけないのでは。

**ファシリテーター1　記録１　参加者　4**

・仙台市の“バスを避難所に活用”のように緊急の判断、やり取りが成り立つ関係が大切。

・地域内に防災チームがあればもっと安心できる。

・墨田区でも、水害に備えて高層ビルやマンションに避難できるよう、地域と管理会社が契約できればいいと思う。

・マンション自治会と地域が融合するのはむずかしい。古くからの住民と、新しく住んだ人たちの意識の違いがある。

・実際、避難所まで、自分の足で歩いて確認することが大切。子どもたちに参加してほしい。

・普段から体力を養っておく。介護予防の大切さを再認識。

・災害時には福祉施設職員も混乱する。普段から災害時の行動について徹底しておく必要がある。

・要援護者の個人情報は、公表に当たって本人の意思確認も必要になる。障害者があるかないかなどはデリケートな問題だ。

・保育園で週１回高齢者食事会をしている。高齢者の集う会があると、安否確認につながる。

・児童館でも高齢者を招く会があると聞いているが、その時に子どもたちも参加していると、災害発生時に子どものボランティアにつながると思う。

・停電すると思わぬ障害が発生する。普段から停電時の動きを想定しておくと良い。

## ファシリテーター1　記録１　参加者　4

・大規模災害には町会の連携がより必要となる。3.11　の時は町会名簿を基に役割分担し、安否確認をした。

・マンション内でサロンを立上げ、高齢者の参加を呼び掛けている。その中で、災害時の対応を話し合っている。

・防災マップ作りは個人情報、守秘義務が壁となる。

・地域資源（物的・人的：医者・看護師等）を把握し、いざとなったら助けあえる関係を作っておくことも大切。

・年１～２回防災訓練実施　いざというとき子どもの方が冷静なことがある。小さいころから参加すべきだ。中学生の育成も大切。

・地域資源の把握は重要だと思ったが反発もあると思う。普段から仲よくしてないと無理。

・マンション管理人と信頼関係がないと、オートロックマンションに入れない。

・手動発電ラジオ、ライト等の備えが必要。

## ファシリテーター1　記録１　参加者　5

〈現状〉

・今日の話は、大変勉強になった。隣近所の付き合いが大事だと感じた。町会費も集めたら、いざという時に使うようにしたらどうか。

・地域の一時集合場所がわからない。避難場所の指定はあるが、自分のところは避難場所として機能しないと思う。

・自分の住んでいるところの町会会館は耐震上、問題がある。

・拠点を作ったあと、そこからの情報を共有化することが大事だ。

・守秘義務が難しい。トラブルの元だ。そうなると近所のネットワークしかない。

・自助、公助、共助の話があったが、「近助（きんじょ）」という言葉がある。

・今は、町内会が崩れている。共助の意識を高めないとだめだ。

・自分の地域では、ここ２～３年の間に５件の孤独死があった。うち一軒は異臭がしていたにも関わらず、気が付かなかった。町会としてはずかしい。家族がとても閉鎖的だ。

・見守り相談室が関わっていない元気な人の孤独死が多い。家族も定期的に連絡すべきだ。

・孤独死が続いたときに町会にも話をしたが、本人が関わりを嫌がるらしい。

〈課題〉

１　個人情報の取り扱いが難しい。

２　オートロックのマンションだと本人に会うことができない。

３　家族が無関心であったり、本人が関わりを拒否してしまう。

〈結論〉

１　人に関わる民生委員や見守りのグループには、連絡システムを作る必要があるのではないか。

２　オートロックのマンションに対しては、緊急時に対応ができるように区で条例を作るべきだ。

３　日頃から近所付き合いを大切にするとともに、家族がもっと関われるような仕組みを考える。

以上のことは、災害対応以前の話で、一番大事である。そこが解決されないと災害時も動くことが難しい。

### ファシリテーター1　記録 1　参加者　4

〈求められること〉

・福祉避難所への取組。災害弱者・要配慮者への対応

・地震以外の災害（水害・水没）、ライフライン復旧までの備え。

・町会だけでは対応できないことは、行政との連携が不可欠。

・各マンションに町会とのパイプ役になるキーパーソンを配置する。

〈課題〉

・東日本大震災の後高まった意識の低下（訓練回数、参加者の減少）

・見守りができないオートロックマンションや見守りを拒否する住民への対応

・避難所ルール、利用についてのモラル

・地域との信頼関係がないため、地域資源活用ができない。（水害時に高層マンションを開放してもらう等）

〈できること・取り組んでいること〉

・自ら備える（①家庭での備蓄　②要配慮者が自己情報を自分から発信する）

・日頃の地域活動（町会のイベント、祭り等）を、子や孫を通して新住民が町会活動に新たに参加するきっかけ作りの場とし、組織の継承につなげる。

・防災訓練参加者を増やすため、炊き出し訓練以外の弁当提供や、祭りでの防災用品の使用が、実質的な訓練になる。

・町会の防災訓練に区内のボランティアサークルが参加することで、地域の新たなつながりができる。

### ファシリテーター1　記録 1　参加者　4

・年２回の防災拠点会議だけで、災害時に活動ができるのか心配である。

・災害時に女性の気遣いができるか不安。女性や若い方にも、もっと参加してほしい。

・女性の参加が少なく、意見を発信できていないように思う。

・小さい会や組織はいくつかあっても、全体の連携が無い。この点が仙台はうまくできているように感じた。墨田はバラバラで、日常的に取り組めていない。そもそも東京は近隣の人のことを互いに知らず、安否確認もできない状況である。

・介護施設でボランティアをしているが、食料等の備蓄はそろっていると聞いている。災害時には施設にとどまり入所者対応することになっているが、その場合自分の家族の安否確認ができなくて、不安だ。

・公的に備えている食料は少なそうなので、自分で備蓄することが必要。
・地域の子どもについては、学校選択制導入後どこにいるかわからなくなった。PTA も別々のため地域の子どもを把握することができなくなった。選択制はいい面もあるが地域離れが進んでしまった。
・隅田川は地震で氾濫するかもしれない。もし氾濫したら、墨田は危ない。ただ、水害については地震よりは対策を立てやすいと思う。
・仙台では３日間耐えればという話があったが、墨田は場所が狭すぎて難しいと思う。避難場所では場所の取り合いになるのではないか。
・防災拠点会議を小学校区から中学校区まで広げようとしている。つながりが薄くなっていくので難しいのではないか。
・若い人は自己中心的な人が多い様に思う。自分のためになると思わせるのが大切。
・まとめ：地域のつながり、事前準備、現実的な計画や訓練が大切である。

## ファシリテーター1　記録 1　参加者　5

・防災訓練のあり方をもっと考えるべき。避難時だけでなく、避難後のシュミレーションも必要。
・災害が起きたら学校に避難者が入りきらなくなると思う。自宅待機できる人は、自宅にいてもらいたい。配給等の問題が課題だ。
・食物アレルギーや病気の人への食べ物の配慮も必要。
・１０年ほど前の町会名簿は充実していた。今は個人情報の関係で名簿が作れなくなっている。安否確認が困難になる。
・地域コミュニティが薄れている。集まりに出てこない人をどうするか。日頃からつながりを持てるような関係を築くことが大切。
・寝たきりの高齢者の避難が懸念される。

## ■エンディング

墨田区社会福祉協議会栗田事務局長から

「今回は熊本地震から日数がたっていないので、『災害に備えるまちづくり』というテーマで開催した。東日本大震災で被災された仙台市からお招きした皆さんから大変貴重なお話を伺うことができた。ディスカッションの時間があまかったが、本日の講演、ディスカッションをこれからの地域活動に生かしてほしい。東京は、今後 30 年間で震度 6 以上の地震の来る確率は 5 割と報道されている。いつ来るかわからない災害には日頃の備えが大切である。社会福祉協議会では東京で災害が発生した場合、災害ボランティアセンターの運営という役割がある。それ以外にも普段から地域の皆さん、民生委員さん、行政等との関係づくりを行って、万全を期していくことが大切な役割だと思っている。

本日のフォーラムが、今後、皆さんの活動の参考になればと思っている。」という話があり、閉会となりました。

## ■展示ブース

今年度は、テーマに合わせて「災害時に活躍するボランティア活動」について、展示しました。

パネル出展者

NPO 法人　さわやかネット

墨田区聴覚障害者協会　手話サークル「すみだ」

障害者福祉課「障害者災害対応力強化事業」

小地域福祉活動・ふれあいサロン

すみだボランティアセンター「災害ボランティアセンター」

## ■その他

1　実行委員会の開催

すみだ地域福祉・ボランティアフォーラムの企画・運営のためにすみだ地域福祉・ボランティアフォーラム実行委員会を設置しました。

⑴　第１回

日時：平成２８年４月２０日（水）午前１０時から１１時半まで

会場：墨田区役所　３１会議室

議題：役員の選出について、フォーラム内容について

⑵　第２回

日時：平成２８年５月１７日（火）午後１時から午後２時半まで

会場：すみだボランティアセンター
議題：フォーラム詳細について、チラシについて

⑶　第３回
日時：平成２８年６月８日（水）午前１０時から１１時半まで
会場：すみだボランティアセンター
議題：詳細の決定、役割分担について

⑷　第４回
日時：平成２４年６月２３日（木）午前１０時から１１時まで
会場：すみだボランティアセンター
議題：当日の資料、役割分担、アンケート等について

２　実行委員

五十嵐　美奈、石鍋　光子、鎌形　由美子、栗田　陽、郡司　剛英、小林　実、須藤　正、頭金　多絵、中村　智世子、三浦　博司、山田　英、吉田　政美
（敬称略：五十音順）

３　広報

区民に広く参加を呼びかけるため、次の事業ＰＲを行いました。

・社協だより（６月号）、区のお知らせ（６月１１日号）社会福祉協議会ＨＰ、区ＨＰ、チラシ・ポスター配布（区施設、町会、保育園、大学福祉系学部等）、区職員向けにイントラネットにチラシ掲示

４　手話通訳・要約筆記・磁気ループ導入

手話通訳、要約筆記をお願いしたほか、一部エリアに磁気ループを配置しました。

５　飲料等の提供

アサヒグループホールディングス株式会社様より協賛品として十六茶及びバヤリースオレンジをいただき、配布しました。
また、区内企業から寄付された防災用食料品を配布しました。